

タシュケントのアメリカ人

小松 久男

1864-65年の冬の冬のこと、中央アジア南部のオアシス地域に侵攻したロシア軍は、タシュケント（現在はウズベキスタンの首都）の攻略を目の前にしていた。この事態は大きく見ると、英露二つの帝国がユーラシア大陸を舞台に展開していた「グレートゲーム」の重大な局面であった。このままロシア軍が南下を進めれば、イギリス領インドは北からのロシアの脅威にさらされることになるからである。しかし、この事態をもっとも憂慮していたのは、もちろん現地のムスリム（イスラーム教徒）住民であった。中央アジア最大の商業都市タシュケントを失えば、コーカンド・ハン国の命運はつきる。そればかりではない。手強い異教徒の支配下に置かれたら、自分たちの生命や財産はいったいどうなることだろうか。人々の恐怖は、かつて中央アジアの諸都市を襲った、同じく異教徒のモンゴル軍のもたらした恐怖に匹敵していたかもしれない。

このときロシア軍を迎え撃ったコーカンド・ハン国の軍司令官アーリムクルには、ターイブ（1830-1905）という有能で忠実な部下がいた。文筆の才と教養に恵まれた彼は、アーリムクルの信任あつく、この危機にあたって密命を与えられた。すでにチムケント（現在はカザフスタン南部の中心都市）を占領したロシア軍の司令官チェルニャエフと交渉して和平条約を結ぶこと、これが彼の使命であった。交渉の末に見事交渉をまとめたターイブは、神への感謝を捧げるべく、タシュケント近郊のゼンギーアタ廟に参籠し、夜を徹してコーランの全章を詠みとおしたという。彼の心は安堵と感謝の念で満たされていたことだろう。しかし、アーリムクルは「ここで和平を結べば、トルキスタンとフェルガナ[コーカンド・ハン国]の無知な民はわれわれの臆病を未来永劫ののしるにちがいない」と判断し、ターイブの努力は水泡に帰する。まもなく、戦闘で重傷を負ったアーリムクルは陣没し、コーカンド軍の退却で防衛するすべを失ったタシュケントは、ロシアの軍門に降る。それから2年後の1867年、ロシアはここにトルキスタン総督府を開設し、新しい中央アジア植民地の経営に着手した。日本ではちょうど大政奉還の年にあたる。

さて、タシュケント開城の直後、都市の名士たち、すなわちイスラーム法の裁判官や長老として尊敬されていた人々は、チェルニャエフ将軍にある請願を行なった。それは、ロシア皇帝と将軍の名においてムスリム市民に布告を出してほしいというものであった。その布告文は次のように述べていた。

偉大なる白きツァーリとその副官たるイスケンデル・チェルニャエフ総督（これはアレクサンドロス大王[トルコ語ではイスケンデル]を引いた敬称で、彼の本名はミハイル）のご命令により、タシュケント市の住民に告げる。何事においても全能の神のご命令と〔預言者〕ムハンマド、彼とその子孫に神の祝福あれ、の正しき宗教の教え、彼によって定められた法に従い、みじんもこれに反することなきようにふるまうべし。

〔・・・〕どこにあろうと日に5回、定められた時間を1時間であれ、1分であれ違えることなく礼拝をおこなえ。ムッラー〔学識者・教師〕には規則正しく学校に通ってイスラームの法を教えさせ、生徒には1時間であれ、1分であれ時間を無駄にさせないように。子供は授業に1時間と遅れることがなきよう、教師には生徒を学校に集めさせ、怠惰に時を過ごさせることがなきようにすべし。強い手段が必要ならば、なぐってでも学ばせ、もしその両親がこれを見逃すようならば、イスラーム法に従ってライース〔監督官〕、市の長官もしくは大カーディー〔裁判官〕のもとに引き立て、しかるべく罰するべし。住民は彼ら自身の仕事にいそしむべし。バザールの者たちは商売に励んで無為に過ごすことがなきように。各自おのおの仕事をすべし。通りに物を投げさせてはならず、これをきれいに保つべし。汝らのイスラーム教は、ブザ〔ビール的一种〕やウィスキーを飲むこと、賭け事やみだらな行為を禁止しているがゆえに、イスラーム法に反する新奇なことはすべて注意して避けるように。〔・・・〕タシュケントの住民は貧富の別なくすべて以上のことをしっかりと守らねばならない。家屋や庭園、畑、土地、水車など汝らの所有物はそのままに残る。〔ロシア軍の〕兵士は何も略奪することはない。ロシアのコサックにされることはなく、汝らの家に兵士を宿営させることもない〔Schuyler 1877-I:115-116〕。

タシュケントの名士たちは、ロシア軍による占領後に都市の秩序が解体することを危惧したにちがいない。チェルニャエフ将軍もこれを了承した。ロシア軍の前にはまだ征服すべき広大な領域が広がっており、無用な混乱は避けるのが賢明であった。概して言えば、ロシアは中央アジアのイスラーム社会に干渉することを避けたが、この原則は征服の直後から生まれていたことがわかる。一方、現地のムスリムも、軍事的には太刀打ちできないロシアの力を目撃した以上、ロシアの統治は受け入れざるをえず、これといかにして折り合いをつけるかが問題となった。彼らの論理は同時代のいくつかの著作に見ることができる。たとえば、1870年ころコーカンド・ハン国の歴史を著した一史家は、戦わずしてロシア軍に降伏したイスラーム教徒のカザフ遊牧民の行動について記したくんだり、次のような詩を引用している。

正義と公正は、異教徒であろうとなかろうと

王権を保つには有効なものを知れ
信仰なき正義は、世の秩序にとって
信者の暴虐にまさる [Bartol'd 1964: 342]

かねてからコーカンド・ハン国の総督の暴虐に苦しんでいたカザフたちは、異教徒たるロシアの「正義」に期待してロシア軍に降ったというのである。これは正義を尊ぶイスラームの論理をもって異教徒への服従を正当化したことを意味する。

その昔ターイブが参籠したゼンギーアタ廟は、今も現存し、多くの参詣者が集まる中央アジア有数の聖者廟である。この廟については以前に『多分野交流プロジェクト研究ニューズレター』に書かせていただいたことがある。少し重なるが、小文の都合上、その沿革についてふれておきたい。ここに眠る聖者の本名は不詳だが、アラブ系とも言われ、肌の色が黒かったことからゼンギーアタ（黒き師父）の通称で知られている。彼は、12世紀に遊牧のトルコ人の間にイスラームを広めたことで知られる聖者、アフマド・ヤサヴィーの弟子と言われる。中央アジアにはやがてこのヤサヴィーを名祖とする神秘主義教団が成立し、多くの信徒を得ることになる。ゼンギーアタ自身も遊牧民の間にイスラームを伝えたのだろう。タシュケント地方は、かつて遊牧民の展開していた大草原とオアシス農耕地域との境界に位置しており、まずはオアシス地域に根をおろしたイスラームを遊牧のトルコ人に広めるには恰好の場所に位置していた。伝承によれば、彼がひたすらアッラーの名を唱えつつ忘我の境地に入っていくと、その周りには自然と雌の羊が集まってきたという。彼は、羊飼いの守護聖者でもあった。

これも伝承によれば、彼の墓は14世紀の末、有名なティムールの時代に「発見された」という。これを聞いたときの帝王とその孫は、この偉大な聖者を称えるために壮麗な廟を建設した。ティムールはこうした建設事業により、自己の権勢を示すとともに、ムスリムの臣民をすべる君主としての正当性を誇示しようとしたと思われる。以後、ゼンギーアタ廟は戦勝を祈願する君主や軍人、あるいは日々の様々な御利益を祈願する人々の参詣地として発展し、やがてモスクやマドラサ（イスラームの高等学院）も併設する一大複合体となった。ゼンギーアタは、タシュケントのいわば守護聖人と見なされるようになり、その門前市は多くの参詣者でにぎわっていた。そして、人々は死後もこの聖者のかたわらに眠ることを望んだのだろう。廟の裏手には広大な墓地が広がっている。ゼンギーアタ廟がこのように由緒正しき廟であったとすれば、大任を果たしたターイブがここに参籠したのもうなずける。

彼の参籠から9年ほど後、1873年にここをあるアメリカ人が訪れている。彼はちょうどこのころ行われていたゼンギーアタの大祭を見物することにしたのである。往来する参

詣者の馬車や馬であふれる街道は濃密なほこりに覆われていた。彼が目にした廟は老朽化して相当にくたびれた様相を呈しており、参詣者が境内の木々に結んだ数え切れないほどの「きたない」小布やあちこちに置かれた羊の角はあまりよい印象を与えなかったようである。しかし、境内のクスノキの老木を目にした彼は、かのマルコポーロが『東方見聞録』に記した聖樹の話を想起している。彼が何よりも驚いたのはその人出の多さであった。「だれもがそこへ行く。タシュケントは、女性と密通の機会到来とばかりに居残りを決め込んだかなりの数の若者を除くとほとんど見捨てられている」と彼は書いている。この若者のくんだり、話としては面白いが真偽のほどはわからない。いずれにしても境内は、タシュケントの男衆が集まり「ダービー競馬の時でもなければ見たこともない」ほどの込みようであった [Schuyler 1877-I:138]。

ロシア軍に投降した著名なウズベクの武将ジュラベクらとともに訪問した彼は、ムスリムの友人たちに迎えられ、マドラサの一隅に休息の場を与えられる。ここで興味深いのは、このとき彼の一行は赤ワインのボトルを持ち込んだのだが、ムッラーも交えたムスリムの友人たちは、外からご相伴にあずかろうとしてくる者が出ないように気を配ったにせよ、これに驚く様子も見せなかったことである。彼らはロシア統治が始まってまもなくのうちにワインのような外来の食文化に違和感を覚えなくなったかのようである。しばらくの休憩の後、マドラサを出て大きな木立に入った一行は、あたかもタシュケント中の食堂主が集まったかのように、テントがけの売店や露店の密集した風景に出会う。そこにはお茶の湯気やピラフなどの料理の匂いが立ちこめ、楽器の音や歌声が混ざり合っている。まさに祝祭の場である。著者はこの大祭について何もふれていないが、ゼンギーアタ・モスクの元イマーム、サリム・アフンド・アタ氏の教示によれば、これは断食（ラマダン）月に先だって行われていた祭事で、参詣者は羊や鶏を犠牲に捧げ、たくさんの食べ物を用意するとともに特別のお参りをしたものだが、ソヴィエト時代の1930年に廟が閉鎖されると、この祭事も控えられるようになり、今はもうすたれてしまったという。

ゼンギーアタ廟の大祭にはロシア軍の高官たちも姿を見せていた。彼らのために用意されたステージでは、大勢の楽士が奏でる地元の曲にのって少年たちが踊りを披露し、その幕間にはロシアの軍楽隊がオッフエンバックの喜歌劇『大公妃殿下』（1867年作曲）などからの抜粋を演奏していた。ちなみに、この曲の軽快で躍動感にあふれる一節は、日本のスポーツ番組のイントロでも使われることがあるので、聞かれた方も多いことだろう。ヨーロッパの新曲がまだ鉄道線も通わぬ遠隔の中央アジアで演奏されていた事実は、共時性の一例として興味深い。ロシア軍の高官たちがムスリムの参詣者とともに聖者廟の大祭に集ったのは、ロシア統治の安定性を示すよい機会となったかもしれないが、このアメリカ人は、軍の将官たちを歓迎するためとはいえ、ムスリムの宗教的な祭礼に女性の踊りを披露させるロシアの役人の無神経さを指摘することも忘れてはいない。

このアメリカ人とは、このとき合衆国のサンクトペテルブルク総領事を務めていたユーゲン・スカイラー (Eugene Schuyler 1840-90) である。著名な官僚ジョージ・ワシントン・スカイラーを父にニューヨーク州のイサカに生まれた彼は、イエール大学で法学を学んで弁護士となったが、語学に関心があったために外交官に転身し、1867年にはモスクワの領事に任命された。ロシアでの活動が続けるうちに彼は多くのロシア人と親交を結び、帝立ロシア地理学協会の会員となったほか、後には陸軍大臣ミリューチンにも知己を得たという。1873年、彼が中央アジアすなわちロシア領トルキスタンを訪問したとき、ロシア軍はまだ征服作戦を遂行しているところであった。中央アジア南部のオアシス地域を支配してきたウズベク系の3ハン国はいずれもロシア軍に手ひどい敗北を喫していた。コーカンド・ハン国は崩壊の瀬戸際にあり(1876年にロシアに併合)、ヒヴァとブハラ両ハン国は帝政ロシアの保護国となった。スカイラーは中央アジア史の一大転換期を見たことになる。

彼はこのときの観察をもとに、*Turkistan: Notes of a Journey in Russian Turkistan, Khokand, Bukhara, and Kuldja* と題する著作を書き、それは2巻からなる本として1876年にロンドンとニューヨークの書店から同時に刊行された。この本はたんなる旅行記ではない。序文に「私の中央アジア旅行のおもな目的は、最近ロシアに併合されたばかりのこの地域の政治、社会的な状況を調査すること、ならびにロシア統治下の住民となおもハンたちの専制の下に暮らす人々の状況を比較することにあつた」とあるように、彼はロシア統治下のトルキスタンで何が進行しており、どのような問題が起こっているか、その検討結果を記しているのである。それは今風に言えば地域研究の成果と言ってもよいだろう。彼はロシア人と現地のムスリムの双方から多種多様な情報を聞き取り、人知れず眠っていた文書を閲覧、翻訳して考察と叙述にいかしている。

当時合衆国はまだこの地域に戦略的な関心を持っておらず、ロシアとイギリスというグレートゲームの両当事者からも距離を置くことができたためだろう、彼の記述には政治的な偏りが見られない。序文にはロシアの友人たちを意識した次のような文章がある。「読者に信じていただきたいのは、中央アジアにおけるロシア統治のいくつかの欠陥に対する批判はあら捜しのためではないということである。ロシアの政策の過誤が知られ、それがすみやかに改善されることは、明らかにロシアの利益になる」と。彼の偏見にとらわれない観察は、その詳細な記述とあいまってこの著作の史料的な価値を高めることになった。中央アジア史の泰斗として知られるロシアの東洋学者バルトリド(1869-1930)は、『トルキスタン文化史』などの著作でスカイラーの記述を頻繁に引用している。これはロシアの実証史学から見ても、スカイラーの記述は信頼が置けたことの証左と言えるだろう。また、刊行の翌年には『挿画入りトルキスタンの歴史と旅行記』という書名でオスマン帝国

の首都イスタンブルでオスマン・トルコ語への抄訳が刊行されている。訳者はイスタンブル沖合のヘイベル島にある海軍兵学校の英語教師で准佐（少佐と大尉の間の階級）のアフメト・エフェンディであった。スカイラーの著作は、ロシア領中央アジアの最新情勢を知る上でオスマン人にとっても有益とされたことがわかる。なお、スカイラーの著作が刊行された1876年、彼はイスタンブル（コンスタンティノーブル）の合衆国総領事職にあり、序文もそこで書いている。

スカイラーのロシア領トルキスタン滞在はおよそ7ヶ月で、この間にコーカンド・ハン国の本拠地にあたるフェルガナ地方やサマルカンド、ブハラ、さらには当時ロシアが占領していた清朝領のイリ地方（中心都市はグルジャ）を旅している。各地になお不穏な状況が続く中でこれだけの調査をやりとげた彼の行動力は尋常ではない。しかも、彼は随所に鋭い観察を残している。前記のタシュケント占領直後の布告文も彼が探し出して紹介したものであるが、たとえばロシア統治の前後で現地のムスリムの慣行がどのように変化したのかについて、次のように記している。

ムスリムが彼らの宗教儀礼をかくもキリスト教徒に見せたがるのは、彼らの主人たるロシア人を喜ばせたいのか、それとも彼らの間に忍び込んできたリベラリズムのしるしなのか、私にはわからない。しかし、やがてこれはしだいに無頓着な気風が強まったせいだと考えるようになった。中央アジア諸国ではどこでも、宗教儀礼を守らせるには厳しい罰が必要だとみなされてきた。コーカンドとブハラにはいずれもライースとよばれる役人がおり、その任務は必要とあれば人々を店や仕事場から追い出してでも、住民にモスクでの礼拝を強いることである。この役人に儀礼のだらしなさが知られると、彼もしくはその助手は右肩にかけている、柄に結ばれた幅広の革帯でただちにその者を打ちすえるのである。そのさい、肘から上は動かさないようにしなければならぬが、それでも痛さは免れない。ロシア人はタシュケントを占領すると、ライースの職を廃止したが、それ以来儀礼を守らないことが目立つようになった。中央アジアのファナティシズムについて多くのことが語られてきたが、この地のファナティシズムは、その実うわべにすぎないように見える。ムッラーやデルヴィシュ〔托鉢僧〕は、ときには面目を保つために、ときにはそうすることが利益になるから狂信的なのである。ほとんどの人々は人前でこそ敬虔にふるまうが、誰も見ていないところでは、多くの儀礼を省き、罪をおかす。しかし、罪をおかした者が見つかり、大声をあげて非難するのである [Schuyler 1877-I: 90-91]。

ヨーロッパ人やロシア人の旅行記では、往々にして中央アジアのイスラームのファナテ

イズムが強調されていたが、スカイラーの観察はその裏を読みこんで秀逸である。しかし、こうした側面が観察されたとしても、ロシアによる征服の後にイスラームの戒律がゆるみ、イスラームそのものが弱体化したというわけではない。やがてロシアの軍事力の記憶が薄れ、ロシア統治のほころびが見えてくると、さまざまな揺り戻しが現れてくることになる。たとえば、トルキスタンの事情に通じていたあるロシア人は、1880年代末からコーカンド・ハン国の故地フェルガナ地方のムスリムの間には次のような説教が流布していたことを指摘している。

異教徒がわれらの土地を侵し、われらの町を次々と攻略したとき、土地のムスリムはいったい何をしていたのか。彼らは託されていた異教徒との戦いを実践しただろうか？異教徒がわれらが父祖の墓を馬蹄で蹂躪しないように全力を尽くしただろうか。いや、彼らは何もしなかった。ごくわずかな者が戦場に倒れ、最後の審判に白い顔で、自分の血に染まった衣、すなわち預言者の遺訓に従って信仰のために倒れた殉教者、シャヒードの衣を身にまとって審判の中の審判の前にたたずむのみである。

異教徒がわれらの地を征服したとき、小心なムスリムは「信徒は不信仰の友をもってはならぬ」というコーランの言葉を忘れてロシア人と親交を結び、彼らの好意を得ようとして父祖の信仰を愚弄し、彼らとともに飲酒にふけるようになったり、彼らをまねて自分の妻や姉妹、娘を連れて行くようになったりした。

我に返って周りを見渡してみよ。今が昔よりも良くはないのがわかるはずだ。異教徒と我らの内の狡猾な者どもは、あらゆる手を使って民を搾取し、墮落させている。それは、神の怒りが民に下り、彼らの忠実な友である悪魔の手を借りて民をすっかり衰弱させるためなのだ。呪うべき悪魔の誘惑と我らの内の不信仰者どもの企みのために、もはや公正で買収されざるカーディーはいない。

思い直して、周りを見渡してみよ。考えてみよ、はたして正しきムスリム社会は生き残ることができようか。これまでに起こった醜悪なことどもにこれ以上我慢することができるのか。異教徒とその忠実な共犯者たる悪魔の不浄の手が民とその心を奪い取ろうとしているというのに、これをみな黙認することができようか [Nalivkin 1913: 132-133]。

このように過去のハン国時代を美化しながら、イスラーム法の遵守を強調する説教は、やがてロシアに対する反乱の土壌を生むことになるが、それはスカイラーがトルキスタンを去って四半世紀後のことである。

スカイラーがその旅行と著作の中でみずからに課したもっとも大きな課題の一つは、中

中央アジアにおけるロシアの統治をどのように評価するかであった。彼の著書には「ロシアの行政」という一章が設けられ、この問題を詳細に論じている。まず目につくのはロシアの植民地経営の収支を細かく勘定して、この遠隔の地の経営はロシアにとってとても引き合わない赤字経営であると指摘していることである。トルキスタンには当初期待されたほどの資源はみあたらず、ロシアが経営に投じた資金はほとんど回収されていないというのが彼の意見である。たしかに彼の時代はまだ植民地開発にはほど遠い段階にあり、ロシアの経済的な利益は限定されていたかもしれない。しかし、古来綿花の栽培されていたオアシス地域に繊維の長い、ほかならぬアメリカ種の綿花が移植され、ロシア本土と中央アジアとを結ぶ鉄道線が開通すると（1906年）、トルキスタンはロシアの木綿工業に原料綿花を供給する重要な基地となる。長く原料綿花をアメリカ南部からの輸入に依存してきたロシアは、帝国領内にその供給源を確保することができるようになったのである。

スカイラーがロシアの統治について高い評価を与えたことの一つは、宗教すなわちイスラームに対してとった政策である。これについて、彼はこう書いている。

宗教に関する限り、ロシア人の行動は最高の賛辞に値する。ムスリムの信仰や慣行について何一つ制約は課されなかった。例外はデルヴィシュで、公序を乱すと見なされた彼らは一般に街頭に現れることを禁じられてきた。キリスト教を広めようという努力はまったくなされなかった。タシュケントやいくつかの〔ロシア軍〕駐屯地には教会があり、州の主教もいるが、〔初代の〕総督カウフマンはあらゆる宣教計画をあつさりやめにさせた。その結果、イスラームは強まるかわりに弱まった。現地民は、ロシア人によって禁止されたので、彼らの宗教にもっと忠実に従うことをやめたからである。〔礼拝のような〕日々の宗教儀礼を人々に強いる役職が廃止されたので、無関心や無頓着が忍び込むようになった〔Schuyler 1877-II: 235〕。

しかし、その他のことになると、スカイラーの批判の眼はほぼ全面的に展開していく。トルキスタンでは1917年のロシア革命に至るまで陸軍省の管轄下に事実上の軍政が行われていたが、ここに赴任した将官や将校には不適格な人材が多く、現地の実状を知ろうともしない彼らは不正と浪費に明け暮れているというのが彼の評価である。このような議論をするとき、おそらくその客観性を担保するためであろう、彼はしばしばトルキスタンで勤務した経験のあるロシア軍人が書いた報告書を引用している。それらの中には職業軍人の率直な上申書として陸軍省に送られながら、トルキスタン総督カウフマンの介入によって握りつぶされた文書も含まれている。中でも興味深いのは、1871年にある高級将校が書いた報告書である。その一部を引用してみよう。

現地民から見ると、我々は中央アジアに到来するやいなや発揮すべきであった自分た

ちの徳の高さからは遠く隔たっている。我々は、我々の道徳的な影響と政治的な優位の源泉であるべき信頼というものを現地民に植え付けることができなかった。現地民に対するロシアの文明化の使命を實踐すべき高い徳性が欠けていたのである。中央アジアの行政にあたる我々の役人たちの大半は、その悪性において際立っていた。彼らは自らの快樂のために国庫の金を浪費してきた。さらに彼らの一部は部下の有罪判決に反して赦免されたにもかかわらず、犯罪者を発見すべく政府が命じた調査は何年も手間取り、結論を得ないままになっていた。現地民はこれらの遺憾な現実をすべて見ており、彼らのやり方でコメントしている。曰く、「ロシア人は我々にとってコーカンド人よりもまともかって？ロシア人も我々の娘や妻を連れ去り、ちょうどベクたちがハンの金を浪費したように、ツァーリの金を浪費している」と [Schuyler 1877- II: 225]。

ロシアによる「文明化の使命」とは、中央アジアを征服するにあたって掲げられた大義にほかならない。それは奴隷制の廃絶と並んでロシアの統治を正当化するはずであった。しかし、この大義を掲げたロシアの軍政官は、現地民からはかつてのコーカンド・ハン国の悪代官とさして変わらぬ存在と見なされているのである。

アジア人は彼らが見ることを望んだものや我々が約束したものを何一つ見いだすことがなかった。したがって、彼らは何のためらいもなく我々の社会的な弱点に指を向ける。彼らはそれを見ており、我々よりもよく理解しているからだ。我々の所行は、我々が征服した民やその隣人たちに当初信じられていたよりもはるかに好ましからざる印象を与えている。文明化の使命はこれまでのところ、せいぜいこの地の人々にロシアの紙幣を普及させるにとどまっている。その代わりに、我々は彼らの落ち度につけこんでいるのである。これでは彼らに我々の道徳的な優越性を認めさせることなど不可能である。これこそ長きにわたり我々は絶えざる武力の威嚇によらずしてアジア人を統治したと主張しなかった理由である [Schuyler 1877- II: 225-226]。

この自省心に富んだ将校の報告書はスカイラーの琴線にふれたにちがいない。彼はまた別の将校の報告を引用してコメントを付している。

もう一人の将校は、1872年に郡長を含む5年間の勤務の後にこう書いている。「我々はいつも住民からより多くを要求した。遺憾ながら、税に関してはつねにより多くを要求している。しかし、我々は住民のためにいったい何をしてやれたのだろうか。たしかに我々は彼らに安寧を与えた。我々は彼らを貪欲な隣人から守り、常習となっていた極刑を軽減した。しかし、それだけである。人々の経済と生活についていえば、

我々はタシュケントや各種委員会の席上でなされた雄弁なスピーチを除くと、まったく何ももたらしはしなかった。」これは、私はよく知っているのだが、心底から自分の管轄下の住民のために服務した人物、タシュケントの上司には何を言ってもいつも却下されていたので、不満以外は自分の仕事から何の報酬も受けなかった人物、不作の年であっても増額された税を取り立てることをしいられた人物のおそらく悲観的な見方なのだろう [Schuyler 1877-II: 234]。

「悲観的な見方」とはいえ、スカイラーがこの将校の報告に共感を持っていたことは明らかである。ロシア行政の不備と欠陥に対する彼の批判はとどまるどころがない。彼の批判精神と率直なもの言いは、次の任地オスマン帝国の首都イスタンブルでも発揮された。その任期中に彼はブルガリアの反乱に対するオスマン政府の残虐な弾圧を告発する報告書を発表し、欧米では反オスマン世論の支持を受けたものの、オスマン政府からは反発を受け、一方ではロシアのバルカン政策への加担を疑われて解任されたという。それでも、先にふれたように彼のトルキスタンに関する著作の翻訳がイスタンブルで刊行されたのは興味深い。

スカイラーの目は中央アジアを越えて、イスラーム世界にも開かれており、その動向についてもところどころで触れている。彼が注目したのはアラビア半島で勢力を強めつつあったワッハーブ派の運動であった。預言者ムハンマドの時代の純粋なイスラームへの回帰を唱え、オスマン帝国にも反旗を翻したこの集団について、彼はこう書いている。「最近のワッハーブ派による純粋なイスラームの復興は中央アジアまで到達しなかったが、インドとアフガニスタンでは多くの熱心な信者を有している」と [Schuyler 1877-I: 156]。インドとアフガニスタンのワッハーブ派とは、イギリスと敵対していたインド・ムスリムの聖戦士運動にイギリス側が与えた名称であり、アラビア半島のワッハーブ派と直接の関係はない。このことはさておき、スカイラーはイスラームの将来についてこう述べている。

着実な改革と進歩は、内から生まれてくるにちがいない。一つの大きな改革の試みがすでになされた。ワッハーブ派である。それは過てる熱意においてイギリスのピューリタン運動に比肩される。しかし、イスラームのもう一つの大きな復興が近い将来に起こると信じる理由がある。それが世界にとってどれほど有益なことになるのか、それを語れるのは未来だけである [Schuyler 1877-I: 172]。

スカイラーは「イスラームのもう一つの大きな復興」について明言してはいないが、1876年末オスマン帝国では最初の憲法が發布され、翌年3月にはこれも初めての帝国議会が召集されている。彼は、復古主義的なワッハーブ派とは対極にある、近代主義的なイスラ

ム改革を想定していたのかもしれない。

中央アジアのイスラームは、その後大きな変化を経験した。帝政ロシアに代わったソヴィエト政権は科学的無神論を掲げ、イスラームを中央アジア社会の発展を阻害する要因とみなして、これを社会や文化のあらゆる領域から排除する施策をとった。1930年に閉鎖されたゼンギーアタ廟が再開されたのは、政権とイスラームとの和解が宣言されたベレストロイカ期の1989年、ソ連解体の2年前のことである。このころから中央アジアではイスラーム復興が急速に進み、グローバル化したイスラーム潮流との接触を契機として「真のイスラーム」を唱えるグループも出現した。彼らは、ソヴィエト政権の抑圧も神が与えた試練として堪えてきた伝統的なイスラームを否定し、イスラーム国家の樹立を求めた。彼らによれば、ゼンギーアタのような聖者廟に参詣することも、本来の正しいイスラームからの逸脱となる。この新しい、主張するイスラームを伝統主義派は「ワッハービー」とよび、中央アジアの伝統にはなじまない異質な教義としてこれを排斥した。両者の間に妥協はなく、新独立国家の政権もワッハービーを危険な原理主義と認めて警戒と弾圧を強めている。

ゼンギーアタ廟には今も参詣者が絶えることはない。しかし、伝統的でローカルなイスラームとグローバル化したイスラームとの間には鋭い緊張関係が走っている。その一方で、政権の腐敗や不正は反対派の言説に根拠を与えかねない。スカイラーの著作は、中央アジアのイスラームの動態を1世紀以上の長いスパンで考える上で、今も有益な史料と言うことができるだろう。

参考文献

V. V. Bartol'd, "Tuzemec o russkom zavoevanii," *Sochinenija* 2 (2), Moskva: Nauka, 1964.

V. P. Nalivkin, *Tuzemcy ranishe i teper'*, Tashkent, 1913.

Eugene Schuyler, *Turkistan: Notes of a Journey in Russian Turkistan, Khokand, Bukhara, and Kuldja*, 2 vols., New York: Scribner, Armstrong & Co., 1877.

[Eugene Schuyler], *Musavver Türkistan Tarih ve Seyahatnamesi*, İstanbul, 1294 (1877).

Eugene Schuyler, *Turkistan: Notes of a Journey in Russian Turkistan, Khokand, Bukhara, and Kuldja*, edited with an Introduction by Geoffrey Wheeler, London: Routledge and Kegan Paul, 1966.

小松久男「中央アジアのコンスタンティノーブル」『多分野交流プロジェクト研究ニューズレター』38号、2002年

V. V. バルトリド（小松久男監訳）『トルキスタン文化史 2』平凡社（東洋文庫）、2011年